

## 19世紀後半の伊万里焼生産におけるヨーロッパの影響

阿久津マリ子

### はじめに

肥前で製造された磁器、伊万里焼は17世紀半ばからオランダ東インド会社によってヨーロッパに輸出されていたが、その後19世紀後半の幕末期にパリで開催された万国博覧会に日本が参加し、佐賀藩出品の伊万里焼はジャポニズムの影響に伴い大きな反響を呼んだ。佐賀藩は同時に優れた西欧陶磁器<sup>1</sup>を目にし、その均等な厚みや均質さと競合しえる磁器生産の開発が不可欠であると認識した。そのため急速な西洋技術の導入が図られた。

万国博覧会は19世紀後半にパリだけでも3度も開催され、その都度日本は参加しヨーロッパ各国の陶磁器製品のみならず陶製機械などの調査も怠らなかった。このように明治前期の伊万里焼の近代化はヨーロッパの強い影響を受けていたが、ヨーロッパから導入された近代技術というのは具体的にどんなもので、その後の伊万里焼産業にどのような効果を及ぼしたのであろうか。19世紀後半の伊万里磁器近代化に反映されたこれらのヨーロッパの影響を、それに深く結びついている万国博覧会の役割をも含めて考察してみたい。まずは伊万里焼とそのヨーロッパ輸出について簡単に触れてみたい。

### 伊万里焼とヨーロッパ輸出

江戸時代初期に日本初の磁器が佐賀県有田地域を中心に生産された。江戸時代に窯は佐賀・長崎県一帯に広がっていたため、肥前焼とも有田焼とも呼ぶ。この肥前磁器は伊万里の港から船で全国に出荷されたため、港の名をとって伊万里焼と呼ばれた。伊万里（今利、今里とも書く）焼の名の初見は寛永15（1638）の松江重頼著「毛吹草」にあり、翌年16年の鳳林承章の日記「隔冥記」にも早くから記され、国内ですでに流通していたことがみられる。<sup>2</sup> 肥前での磁器生産の創始は文禄・慶長の役（1592—1598）、別名「焼き物戦争」の際に鍋島藩藩祖鍋島直茂（1538—1618）が朝鮮から連れ帰ってきた陶工の一人李参平と言われている。<sup>3</sup> 1616年に有田の泉山で白磁鉱石を発見し、具体化していった。

1644年以降の中国の内乱、遷界令に伴い中国の景德鎮の磁器の輸出が激減し、日本への輸入が止まり国内の磁器需要は伊万里焼に集中した。この中国磁器輸出激減は日本のみならず

<sup>1</sup> この万博に出品された西洋の磁器はセーブル(1745～)、ベルリン(1751)、マイセン(1710)、ロイヤルコペンハーゲン(1775)、リモージュ(1797)、アビラント(1842)などである。

<sup>2</sup> 毛吹草の肥前の物産の中に「今利ノ焼物」が記されている。「隔冥記」には寛永16年閏11月13日の条に「今利焼藤実染漬之香合」と記述されている。

<sup>3</sup> 有田皿山(窯場のこと)代官であった山本神右衛門の「山本神右衛門重澄年譜」(1707)によると鍋島直茂は6,7人の陶工を連れて帰ってきた。

らず世界中に影響を及ぼすことになり、伊万里焼の海外輸出が始まることになった。ヨーロッパへの本格的輸出は 1659 年から始まりオランダ東インド会社によって柿右衛門や金襴手などが輸送された。<sup>4</sup> ハンプトンコート宮殿にある柿右衛門様式六角壺などの伝世品がイギリスに多く残っている。<sup>5</sup> 1684 年の展海令により中国磁器の輸出が再開し磁器市場の首座を奪い返し、また 18 世紀初頭にはドイツで磁器が製造され始めるなどの原因により伊万里焼の輸出は減退していった。次にヨーロッパ市場への伊万里焼輸出が盛んになるのは幕末から明治の万国博覧会をきっかけにしてである。

### 1867 年パリ万国博覧会

日本の万国博覧会への正式な参加は 1867 年のパリ万国博覧会が最初であるが、それ以前 1862 年のロンドン博覧会において日本の美術品が初代駐日総領事ラザーフォード・オールコックによって展示された。しかしこれらを目にした文久使節団は「見るに耐えないガラクタ品」と評価した。1867 年のパリ博覧会では幕府と佐賀・薩摩両藩が参加し、佐賀藩が大量に出品した伊万里焼は好評を得た。ジャポニズム流行下、日本美術品は特に注目を浴びたのである。特に酒徳利を購入し金具をつけてランプのスタンドに用いているようであった。しかし佐賀藩は同時に優れた西欧陶磁器を目にし、その均等な厚みや均質さと競合しえる磁器生産の開発が不可欠であると認識した。佐賀藩はドイツ人の科学者ゴットフリート・ワグネル (1831-1892) を招聘し 1870 年の 4 月から 8 月までの間、磁器製造の研究に当たらせた。<sup>6</sup> 中国渡来の高価な染付けの顔料である呉須に代えて安価な酸化コバルトの仕様、赤・黄・緑を本窯 (素焼き生地に釉をかけ最高温度で窯をやくこと) で発色させる釉下彩 (透明釉の下に描く絵付け)、また金の分解遊離技術を伝授した。また薪炭(たきぎとすみ)に代わってこの地方に豊富な石炭を使うことを提案し、石炭窯を築いて実験した。ワグネルはその後も教育者として近代科学・技術などを教え、また新製陶器吾妻焼・旭焼の開発にも力を入れた。このワグネルは 1873 年のウィーン万博にも大きく関わった。

### 1873 年ウィーン万国博覧会

伊万里焼の近代化はウィーン万博参加によってさらに推進されることになった。明治政府は博覧会事務局を設置し総裁に佐賀藩の大隈重信、副総裁に同じく佐賀藩の佐野常民が任命された。佐野は前回のパリ万博にも佐賀藩の責任者として派遣されており、また佐野の強い希望で伊万里焼生産に深い関わりのあるワグネルが徴用され御用掛に任命された。ウ

<sup>4</sup> オランダ東インド会社(Vereenigde Oostindische Compagnie)は 1602 年に発足された世界初の株式会社。1609 年平戸商館開館、1641 年長崎出島に移転。1799 年解散。1859 年に出島のオランダ商館は閉館した。

<sup>5</sup> メアリー二世が収集した東洋陶器のうち現在 100 点ほど残っている中で日本磁器は 18 点あり、色絵花鳥文六角壺は別名ハンプコート様式とも呼ばれる。

<sup>6</sup> ワグネルはドイツのお雇い外国人でアメリカ企業の石鹼工場設立に当たり長崎に招聘されたが、廃止になって有田にやとわれて伊万里焼の窯業技術指導に当たった。

ウィーン万博で伊万里焼は大賞を得、特に大花瓶や火皿など大物類が欧州人の目を驚かせた。この万博の際佐野は陶磁器の最新技術の習得のために伝習生を随行し、ヨーロッパの製造所にて研修をさせた。納富介次郎（1844－1918）、川原忠次郎（1849－1889）、丹山陸郎（1852－1897）の3人である。<sup>7</sup> 納富と川原は肥前の出身である。研修先は北西ボヘミア地方で丹山は約2ヶ月間クロステレのグラフ・チューン磁器会社、納富と川原はエルボーゲンのハイディングー兄弟磁器会社に約半年とそれぞれ技術習得に励んだ。<sup>8</sup> 彼らは量産技術、特に石膏型鋳込み法、石膏型成形法、機械ろくろ製作法などを学び、日本帰国後多くの陶磁器産地で講習会などを開き国内に広めた。しかし石膏が高価であったため産地での普及にはかなりの時間を必要とした。終了後はフランスのセブル窯等を視察してから帰国したが、研修先にボヘミア地方を選んだのは資金・時間的問題とウィーン万博開催当時最新鋭の西欧技術を備えた大量生産型の工場が集中する地域であり、政府の方針に合致したからであった。殖産興業の一環として明治政府は当時の在来産業の中心である陶磁器の海外輸出の拡大を目指し、伊万里焼の大量生産、技術改良を促し援助を惜しまなかった。

### 香蘭社

ウィーン万博には歴史学者である佐賀藩出身の久米邦武（1839－1931）も会場を訪れていた。当時岩倉使節団が欧州各国を歴訪して最後の頃に訪れたのがオーストリアであったが、久米はこの使節団の大使随行として博覧会会場に臨んだのであった。この会場で川原と会見し、佐賀に帰国後欧米の先進技術と製造から販売まで一貫運営の会社組織を有田に導入することを有志に説き、深川栄佐衛門、手塚亀之助、深海墨之介、深海竹治、辻勝蔵の5名が現在で言う取締役になり香蘭社を結成した。1875年のことである。翌年1876年にはフィラデルフィア万博にも参加し最高の賞を授与された。会場ではフランスのセブルの製品よりも高価で売れたという。しかし経営方針をめぐる対立がおこり、会社発足間もなく内紛が持ち上がった。1878年パリ万博参加につき深川が欧州出張中に他の4人が輸出用高級日用食器の生産工場を一本化した体制を築くため政府要路の了解を取り付けた。深川は帰国後まだ不安定である輸出向け高級日用食器生産には反対し、ここで香蘭社が分離して香蘭社は深川の単独経営となった。

### 精磁会社

<sup>7</sup> 画家の納富介次郎は帰国後江戸川製陶所設立、金沢工業学校・富山県富岡工芸校・香川県工芸学校・佐賀県立工業学校を創立するなど工業・工芸教育に携わった。貿易業務に携わっていた川原忠次郎は納富介次郎の江戸川製陶所の経営に参加した。のち精磁会社設立。丹山陸郎は京焼の陶工。のちに中国・ペルシャで陶磁の調査を行った。明治15～19年までフランス陶器工業大学研究生として留学。明治期京焼の革新発展に寄与した。

<sup>8</sup> ハイディングー兄弟磁器会社(Gebrueder Rudolf und Haidinger k.k.priv. Porzellanfabrik, Elbogen)は1815年開窯、1945年閉鎖。グラフ・チューン磁器会社は1793年に開窯、1945年閉鎖。ともに経営者の変遷が多く社名も数年ごとに変更された。

1879年香蘭社分離後、手塚、深海兄弟、そして辻の4人は新たに川原忠次郎を加えて同年新会社「精磁会社」を設立した。精磁会社設立以降も辻の看板である宮内省御用達の販路を保持し、和風染付け磁器の納入を続けた。翌年からは染付けに加えてフレンチ形洋食器の注文を受けるようになり、欧米で使用されているような高級日用食器の製造を開始した。輸出用以前に宮内省ご注文の製造から徐々に着手していった。このフレンチ形高級日用食器はいわゆるディナーセットと呼ばれるもので、スープ皿・食皿・菓子皿・パン皿・サーモンプレート・キャセロール・野菜鉢・コーヒー碗など一揃えである。1881年の内国勸業博覧会<sup>9</sup>の開催時アメリカの貿易商エイブラム・フレンチ商会との接触に成功し、同商社との取引を開始した。当時アメリカ市場ではアメリカ人輸入業者ダビッド・アヴィランドがフランスのリモージュに工場を設立した「アヴィランド」の高級ディナーセットが輸出され好評を得ていた。それ以外でもアメリカではフランス製品が市場を席卷しており、フレンチ商会はアヴィランドの全米における最も有力な代理店であった。フレンチ商会はアメリカへの輸出を伸ばすため精磁会社が改善すべき点を具体的に指摘した。つまり西欧受けするデザインの指定と機械化による一貫性生産である。デザインは白磁に絵付けをあまり施さないシンプルなもので注文品としては丼物・皿・調味料入れなどがあつた。しかしこのデザインを採用しても規格の整った均質の洋食器を大量生産するには陶製機械の導入が大前提であった。

### フォール社の機械導入

1883年のアムステルダム万博における出品のため川原は渡航した。万博では一等金杯を受賞するが期待をかけていた欧州市場は不況のため販売は不振に終わった。帰路リモージュに立ち寄りフォール社の陶製機械を購入した。それは原料加工から最終仕上げに至るまでの一連の機械であった。このフォール社は1868年にエンジニアのポール・フォール（1845－1903）によって設立され、その陶製機械は1878年のパリ万博において注目を集めた。特に成形機や厚みの異なる楕円皿成形機、のちには粘土を平らに叩き、規定のサイズにプレスし、最終的なフォームへの鉄の刃による仕上げという異なる3つの操作を備えた画期的な機械の開発により手作業で1日100皿の製作が500皿可能になった。リモージュのアヴィランド社もフォール社の機械を使用した。このフォール社の機械購入に当たり精磁会社は政府に資金借入れを依頼した。購入後2年後の1885年に製陶機械が長崎に入港し有田に到着するが、工場建設に1年、また職員の習熟にも時間を要し部品の欠損にもすぐ対応できず順調に稼動するまで到着から2年もかかった。

### 精磁会社の挫折

<sup>9</sup> 内国勸業博覧会は1871年に京都の西本願寺で開催された京都博覧会が国内博覧会初期のものである（京都博覧会社主催）。1877年に上野公園で第一回内国勸業博覧会（政府主催）が開催された。以降81年・90年上野、95年京都・1903年大阪と計5回開催された。産業や技芸の発展に主眼が置かれ、後に価値が出るもの、継続的に商売になるもの、技を極めたものを出品するように要求された。

機械導入前にすでに**1882**年から日本の起立工商会社を通じてフレンチ商会に磁器の販売を開始した。起立工商会社は佐賀出身の松尾儀助により**1874**年に設立された日本初の貿易商社であり、ニューヨークに支店を置いていた。しかし精磁会社の輸出は経済成長によって拡大を続けるアメリカ市場よりも景気が不安定であったヨーロッパ市場に向けられた。何故なら精磁会社は高級陶磁器の製造地域である欧州での販売競争にこだわったからである。**1882**年より西洋への輸出を推進する貿易商社円中組パリ支店を通じて直輸入を図るものの、**1883**年のアムステルダム万博では欧州市場の不景気により販売不振に終わり**1886**年には円中組が倒産した。起立工商会社も同様に**1891**年に倒産した。政府への返済も滞り**1889**年には川原が急逝、**1905**年の台風の襲撃で工場が崩壊、精磁会社は解散に至った。精磁会社失敗の原因は伝統的手工業に熟達する職人が機械による効率的な高級磁器製造を実現できなかった点のみに求められるように見える。しかしこの機械導入は実は香蘭社の方が早く、**1878**年のパリ万博の際に深川がフォール社の製土用機械をすでに購入しており、その後も工業化を進めていった。精磁会社と違うのは深川が全工程の機械製造を好まず徐々に近代化していったことと、販売戦略、とくに装飾磁器や中級日用磁器の製造に踏みとどまり海外陶磁器市場の不安定性の回避をしたことであろう。またむしろ国内販売と碍子の開発・販売に力を入れたことも経営戦略成功の要因の一つであろう<sup>10</sup>。香蘭社は今年創立**130**年を向かえる。

## おわりに

このように明治前期から製造技術の向上に努力した伊万里焼業者であるが、その西欧技術の導入というのは当時不可欠ではあったもののやはり機械生産による高級日用磁器には品質面では劣っていたため競争に敗れるのは必至であった。では装飾磁器に関してはどうであろう。**1867**年のパリ万博以降ジャポニズムのブームにより日本の美術品は大量に輸出され、伊万里焼もフランスのジャポニザンと呼ばれる日本美術品愛好家の手で多く収集された。もちろんフランス製品の模倣の高級日用品ではなく柿右衛門や金襴手などのいわゆるエキゾチックな装飾を好んだのである。フランスのジャポニズムの影響を受けた陶芸家ももちろん浮世絵ブームの日本風のデザインを中心に絵付けを行っていた。またこの万博後愛好家の間で萩焼・美濃焼・備前焼などの陶器や炆器が注目を浴び始め伊万里焼の人気は徐々に下火になっていった。**19**世紀末にはアールヌーボーの出現により日本美術ブームは廃り、日本美術が源泉であるといわれるアールヌーボーを基調とする工芸作品の製作に取り掛かった。西洋の全くの模倣ではなく日本独自の表現を模索する動きがみられたが、伊万里焼に関しても同様であった。開国以降の伊万里焼の西欧化・西欧技術の導入は着実に取り入れられ、同時に在来技術・近代技術とが融合しながら日本磁器製造のための独自の新技术として定着していくのであった。

---

<sup>10</sup> 碍子は電線を絶縁し支持するために鉄塔や電柱に取り付ける装置。

## 参考文献

- 1) *Almanach limousin*. 1879,
- 2) ARDANT, G. *Histoire de l'industrie de la porcelaine à Limoges*. In *Revue des arts décoratifs*, Paris, 1885-1886
- 3) CHEVALIER, Michel. *Exposition universelle de 1867 à Paris. Rapports du jury international publié sous la direction de Mr. Michel Chevalier*. Paris, 1868, 13vol
- 4) JAHN, Gisela. *Meiji ceramics*. Stuttgart, 2004
- 5) LAJUDIE, Paul. *Mémoires de calibreurs d'assiettes*. Limoges, 2005
- 6) MESLIN-PERRIER, Chantal. *Chef d'œuvre de la porcelaine de Limoges*. Paris, 1996
- 7) MESLIN-PERRIER, Chantal. *Limoges – deux siècles de porcelaine*. Paris, 2002
- 8) Ministère de l'agriculture et du commerce. *Exposition universelle de 1878 à Paris. Rapports du jury international*. Paris, 1880-1884, 14vol.
- 9) Ministère du commerce, de l'industrie et des colonies Picard, Alfred. Ed. *Exposition universelle internationale de 1889 à Paris. Rapports du jury international*. Paris, 1890-1993, 19vol.
- 10) SHIMIZU, Christine. *La porcelaine japonaise*. Paris, 2002
- 11) 愛知県陶磁資料館『ゴットフリート・ワグネルと万国博覧会』2004年
- 12) 蒲池孝典『幻の明治伊万里 悲劇の精磁会社』2006年
- 13) 須見裕『徳川昭武』1984年
- 14) 長井千春「ウィーン万博の伝習生が見たボヘミア地方の磁器生産」『近代陶磁』2007年
- 15) 永積昭『オランダ東インド会社』2000年
- 16) 中山成基『有田窯業の流れとその足音』1980年
- 17) 西田宏子『東西交流の陶磁史』2008年
- 18) 松本源次『有田陶業側面史 上』1985年
- 19) 宮永孝『文久二年のヨーロッパ報告』1989年
- 20) 矢部良明『世界をときめかした伊万里焼』2000年
- 21) 山田雄久「明治前期陶磁器生産における機械導入」『大阪大学経済学』1995年
- 22) 山田雄久『香蘭社 130年史』2008年